

息子は座敷にあまり、

「仙人さま、わたしはわらじをつくつて、その日その日を暮らしておりますが、このたび、おたずねしたいことがあって、ここにまいりました。どうぞおしえてください」と、たのみました。すると仙人は、いろりにあたりながら、

「よろしい。ただし、三つだけだ。そのつもりで話をしなさい」といいます。ききたいことは四つあるのに、三つしかきいてくれないというもので、息子はこまってしまいました。が、たのまれたことをさきにきいてかえろう、と思いました。

「仙人の教え」『日本の昔話5』小澤俊夫再話／福音館書店

息子の旅の目的は、仙人に母親の目のなおし方を教えてもらうことでした。そのために苦労してはるばるやってきたのです。だから、自分の目的をあきらめ、他の人の頼まれごとを優先するのは、どれほどの葛藤があつたことでしょう。けれども、「こまってしまいました」としか書かれていません。内面描写はないのです。

また、この行動から、息子の犠牲的な心の在り方を感じとることができません。性格を行動であらわしているのです。

とうとうガラス山に着きました。その門はかたくとじられています。女の子はひよこの足を取りだそうとしました。ところが、ハンカチをひらいてみると、中はからっぽです。やさしい星たちの贈り物をなくしてしまつたのです。

さあ、どうしたらいいでしょう。兄さんたちをすくいたいのに、ガラスの山の鍵はなくしてしまいました。やさしい妹は、ナイフを取りだし、自分の小指を切りおとし、それを門にさしこみました。門はうまくあきました。

「七羽のからす」『語るためのグリム童話2』小澤俊夫監訳／小峰書店

ここでも、女の子の葛藤は描かれていません。そして、兄たちをすくうために犠牲になるという女の子の心の在り方が、行動によってあらわされています。

ナイフで指を切りおとしカギ穴に差しこむところは、血が流れたりせず、切り紙細工のように図形的に語られています。これも平面性のあらわれでしたね。

じいさまはいよいよこまって、末娘をよびました。

「どこかの美しい若侍が来て、娘を嫁にくれれば、田んぼにあふれるほど水を入れてやるというんじや。それで、娘をやるよ約束してきた。おまえ、嫁にいつてくれ」

すると、末娘は、

「とうさんが約束してきたのですから、わたし、そのひとのとうへ嫁にいきます」といいました。

じいさまはよろこんで、昼めしをすませました。

「鬼の婿どの」『日本の昔話1』小澤俊夫再話／福音館書店

正体もわからない男に娘をやるなんて、ずいぶん乱暴な話ですね。写実的な小説なら、ここで娘の心情が細かく描写されるところです。でも、昔話は内面を描写しません。娘は、父親の約束だからと平然と結婚を承知します。

父親も、男との約束を果たすことしか考えていないかのようです。娘が承知したら、もう悩みはなくなつて、お昼ご飯を食べています。

「猿婿」という話では、相手が猿であっても、「鬼の婿殿」とまったく同じ展開で、三人目の娘が猿の嫁にいきます。